整理番号　18-33

平成 30 年度　プロジェクト研究費研究実績報告書

令和元年５月１０日

代表者　向　井　美　穂

研究課題名	関係性構築における「対話」の有効性：:乳幼児期の育ちを支える多層的関係からの検討
研究期間	平成３０年６月１日～平成３１年３月３１日
共同研究者	上垣内伸子・横井紘子

１．今年度の研究概要

本研究では、乳幼児期の子どもの育ちを支える関係性に焦点をあて、子どもの内的豊かさが育つためにどのような関係性が必要とされるかを多角的にとらえることとし、その関係性を構築する際の「対話」の有効性に着目している。言葉を用いた「対話」だけでなく言葉以外（例えば身体的作用やモノ）の「対話」にも注目する。多様化した日本の子育て・子育ちに共通して必要とされる関係性の構築要因を抽出し、そこから乳幼児期に必要とされる他者・モノとの関わりにおける「対話」の有効性について明らかにすることを目的としている。

2018 年度の研究では「対話」の有効性に寄与している要素を抽出することを第一の目的としている。その為、幅広い領域からの情報を収集することを目指した。情報収集にあたっては（1）各研究者がそれぞれの専門性から「対話」に着目した研究にアプローチする（「対話」について考察した内容を含む学会発表、研修会や講演を行い、参加者からの知見を得る）（2）言葉以外の「対話」とはどのようなものかを探る為、実際の子どものエピソードを様々な場面から探索的に収集する（「対話」の普遍性という視点を重視している為、国内外を問わずエピソードを収集する）（3）乳幼児期の育ちを支えている環境（人的環境・社会的環境・文化的環境等）に着目し、そこでの「対話」の機能を探る、という 3 点に着目して行う事とした。

その後、まとめとして、「対話」の有効性についてそれぞれの専門的知見や学術的背景を交えながら、ディスカッションを行い、第 2 段階の調査へとすすめていく準備を整えることを目指した。

２．研究の成果

平成 30 年度の研究では「対話」をより広義にとらえ、「対話」の有効性に寄与している要素を抽出することを目指した。

（1）各研究者がそれぞれの専門性から「対話」に着目した研究にアプローチする：

学会（のべ８回）や研修会（のべ 5 回）等に参加し、文献や資料を集めた。そこから、ⓐ身近な専門家が親及び子どもとの「対話」を通して、子育て・子育ちを支える社会的仕組み（日本母性衛生学会大会・日本子ども虐待防止学会大会）、ⓑ保育者が「対話」を重ねながら子どもと関わる事でもたらされる子どもの育ち（日本幼児教育学会大会・日本保育学会大会）、ⓒ子ども同士及び子ども自身の「対話」（モノ・身体を含む）の重要性（日本発達心理学会大会・日本保育学会大会）といった知見を得られた。また、保育者を対象とした研修や講演（テーマ；「対話的思考を生み出す保育援助」、「発達と生活の連続性をふまえた保育～遊びの中から見えてくること：Kindergarten where Children can be Children」、「質から考える０～２歳の保育」）からは、参加した保育者との対話により、この研究テーマをさらに追究することができた。

（2）言葉以外の「対話」とはどのようなものかを探る為、実際の子どものエピソードを様々な場面から探索的に収集する：

国内の保育所、幼稚園、子育てサロン、平成 29 年度に行った海外調査（イタリア、フィンランド）等からエピソードを抽出して分析した。

（3）乳幼児期の育ちを支えている環境（人的環境・社会的環境・文化的環境等）:
（2）で取り上げた箇所に加え、家庭内でのエピソードについても検討し、環境が「対話」にどのように作用しているかについて、探索的に分析した。

3 人の研究者により、「対話」の有効性について、対話を重ねた。そこから、「対話」は、①子どもと大人（保育者・親・支援職）②子どもと子ども③子どもとモノ④子どもと子ども自身（身体性も含む）⑤親と専門家（保育者・支援者）⑥専門家と専門家といった多様な関係性の中で実践されており、そこで起きていることに新たな意味生成をもたらしていると考えられた。往還型で対等な関係性の中での対話は自己理解を深め人間関係の質をより深めることにつながっているのではないかと考えられた。子どもとモノ、子どもと子どもの間で生まれる対話的理解および対話的関係構築の姿勢やその体験が、子どもが自分自身と対話する状況をも生み出し、そのことが対象および自己に対する深い理解を導くことが確認された。

さらには、保育学の領域と臨床心理学の領域では共通して大切していることが多くあり、「対話」を中心に据えて分析することで、新たな視点で子ども理解および関係性理解を深めることができる可能性が見出された。

３．研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）

2018 年度
①学会発表
＊研究テーマの中心である「対話」に関連した学会発表
・「イタリア、ピストイア市の保育実践から０～２歳児の教育を考える－(2)　子ども同士の関わりから－ 」日本保育学会第 71 回大会（5 月、宮城学院女子大学）上垣内伸子・向井美穂・他
・「フィンランド・ネウボラにおける切れ目のない子育ち・子育て支援の機能－（２）親がとらえる支援の実際－」日本母性衛生学会（10 月、新潟コンベンションセンター）向井美穂・上垣内伸子・他

②研究成果報告書の作成(H30 年度分）

2019 年度（予定）
①学会発表
＊研究テーマの中心である「対話」に関連した学会発表
・第 72 回日本保育学会大会　シンポジウム（2019. 5. 4）
「実践研究へのいざないⅡ～実践者による主観を生かした研究の可能性を考える」
話題提供者：横井紘子

②2019 年度もしくは 2020 年度の紀要に公表予定